



日本文学全集
39

井上靖

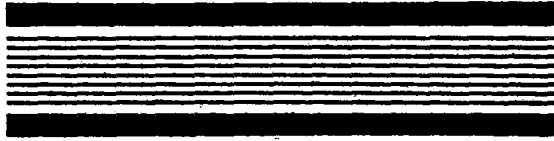


しろばんば・猟銃・闘牛・比良のシャクナゲ
異域の人・楼蘭・洪水・詩集「北国」・他

河出書房



井 上 靖



カラー版日本文学全集 39

1967©

昭和四十二年九月二十日 初版印刷
昭和四十二年九月二十五日 初版発行

定価 七五〇円

著 者 井 上 靖

発行者 河 出 朋 久

印刷者 草 刈 親 雄

装幀者 亀 倉 雄 策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

製 函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河 出 書 房

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七二一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたしません

目次

井上 靖

しろばんば 五

猟銃 二五

闘牛 二五

比良のシャクナゲ 二七

異域の人 二九

蘆 三一

楼蘭 三三

洪水 三四

詩集 北国 三五

注	年譜	解説	色刷口絵	色刷挿画
保昌正夫	福田宏年	進藤純孝	しろばんば	兼統・闘牛・比良のシャクナゲ
三七五	三八八	三九七	小磯良平	異域の人・楼蘭
			福田豊四郎	
			紳原和夫	
			中村岳陵	

井
上
靖

しろばんば*
(全)

前編

一章

その頃、と言つても大正四五年のことで、いまから四十数年前のことだが、夕方になると、決して村の子供たちは口々にしろばんば、しろばんばと叫びながら、家の前の街道をあっちに走ったり、こっちに走ったりしながら、夕闇のたてこめ始めた空間を綿層でも舞っているように浮遊している白い小さい生きものを追いかけて遊んだ。素手でそれを掴み取るうとして飛び上ったり、ひばの小枝を折つたものをして、その葉にしろばんばを引っかけようとして、その小枝を空中に振り廻したりした。しろばんばというのは「白い老婆」ということなのであろう。子供たちはそれがどこからやってくるか知らなかったが、夕方になると、それがどこからともなく現れて来ることを、さして不審にも思っていないかった。夕方が来るからしろばんばが出て来るのか、しろばんばが現れて来るので夕方になるのか、そうしたことにはつきりとしていなかった。しろばんばは、真っ白というより、ごく微かだが青味を帯んでいた。そして明るいうちは、ただ白く見えたが、夕闇が深くなるにつれて、それは青味を帯んで来るように思えた。しろばんばが青味を帯んで見えて来る頃になると、掃宅を促すために子供たちの名を呼ぶそれぞれの家の者の声が遠くから聞えて来た。

「ゆき、「はんだよ」とか「しげ、めしたよ」とか、「早く来んとめし喰わせんぞ」とか、そんな声が、遠くから聞えた。すると、幸夫が居なくなり、次に茂が居なくなるといった具合に、子供たちは一人減り二人減りして行った。

子供たちはお互いに何の挨拶もしなかった。しろばんばの浮遊している夕闇の中を、けんけんしながら家の方へ走って行く者もあれば、ひばの枝を右手に高く翳して、家の方へ勢よく駆けて去って行く者もあった。それぞれ各自の家に呪文でもかけられたように吸い寄せられて行った。

洪作はいつも一番遅くまで遊んでいた。洪作のところは夕食が遅く、洪作の遊んでいるところへ夕食を報せにおぬい婆さんがやって来るようなことはめつたになかった。だから、洪作は毎日仲間が一人残らず居なくなってしまうまで街道で遊んでいるのが常だった。そして友達のためにも居なくなり、夕闇があたりをすっかり閉じこめてしまつてから、自分の家の方へ歩いて行った。

洪作は自分がおぬい婆さんと一緒に住んでいる土蔵に帰り着くまでに、街道に沿つた家々の幾つかの明るい夕食の灯を限にした。子供たちの遊び場は、部落の者たちがお役所とか御料局とか呼んでいる帝室林野管理局天城出張所の正門前に決つていた。そこから土蔵までの間に、道に沿つた家はほんの数えるほどしかなかった。お役所の前に洪作の家の本家に当る「上の家」という屋号の家があった。ここには洪作の祖父と祖母と、そして洪作の母の弟妹たち、つまり洪作にとって叔父叔母に当る男の子や女の子が居た。一番末のみつは洪作と同年であった。

洪作は本家の明るい灯を見、そこに自分の母方の祖父母が居ることを知つていても、そこを覗くことはしなかった。昼間はみつのところへ遊びに行つたり、用事がなくても何回も自分の家と同様に上り込みだりしていたが、夕食の時は、その灯に妙に疎遠なものを感じた。

ここはお前の家とは違ふのだぞ、お前の家は土蔵なのだぞというようなものを、一家の者たちが賑かに談笑しているその雰囲気を感じた。時に、何かの用事で、洪作は本家の上つて、みなが夕食を食べている席に顔を出すことがあつたが、そうした時、祖母のたねは、

「洪ちゃ、ここで食べて行きな」と、必ず声をかけてくれた。

「うらん、うちへ行って食べる」

「ごこも、お前の家だかな。そう嫌わんで食べて行つておくれ」

「うらん、おら、いやだ」

洪作は祖母たねが何と言つても、執拗にその招きには応じなかつた。祖父やその他の者たちは、そうした時大抵洪作のことなどには氣を奪られず勝手に箸を動かしていた。洪作はそうした本家の食事時の雰囲気には反撥せざるを得ないものを感じた。食事時でない時は、自分の家と同様に振舞つていたが、食事時だけはれっきとした他人の家になつた。自分の家でもないのに、御飯など御馳走になるものかといつたところが、洪作の氣持の中にはあつた。

この本家の隣りに小さい路地を挟んで雜貨屋があつた。小さい店に金物類を初めとしていろいろな雜貨が土間からはみ出す程きつり詰まつていた。村ではただ一軒の雜貨屋であり、金物屋であつたので、針金とか釘とか鍋とか庖丁とか、そういった物を買う時は、村人はみなこの店へ来た。

そしてその隣りは「ざどや」という屋号の農家で、母屋おむやのほかに牛小屋があつて二頭の牛がいつも暗い中に鼻をうごめかしてゐた。そのさどやの前に、日傭仕事ひよとせをしている文吉という独身の四十男の住んでゐる小さい家があつた。この文吉の家の隣りが、部落では一番庭らしい庭を持つた洪作の家の屋敷になつてゐるが、今は母屋の方は東京から来て村医をしている医者に貸し、屋敷の裏手の土蔵の方に、洪作とおねい婆さんの二人は住んでゐた。母屋の医者は夫婦者で子供がな

つたので、家の中はいつもしんとしてゐた。医者ではあつたが、患者は殆どなかった。死にそんな病氣にでもならぬ限り、部落の者はたれも医者などには診て貰わなかつた。

洪作はそうした部落の旧道に沿つた四五軒の家々から洩れて来る明りを横眼に見ながら、自分の家の屋敷にはいり、母屋の脇を通つて裏手の一段高くなつたところに建てられてある土蔵へと戻つて行く。洪作が戻る頃、おねい婆さんは大抵、夏でも冬でも、土蔵の階下から洩れているランプの光をたよりに、戸外で炊事をしてゐた。炊事といつても、老婆一人子供一人の生活なので至極簡単な筈だったが、どういうものか、夕食の支度はいつも遅くなつた。

「ただいま」

洪作は言つた。「ただいま」というような言葉は洪作以外村の子供たちは一人も使わなかつた。しかし、洪作はおねい婆さんから、戸外から歸つて来たら必ずそういう言葉を口から出すように言い含められ、それに慣らされて來てゐた。

洪作はおねい婆さんと二人きりで、毎晩ランプの下で遅い夕食の膳に向つた。

「坊」

おねい婆さんは洪作のことをこう呼んだ。

「上の家の方へ今日は何度行つたかい」

「二度だ」

「あんまり行かん方がええ」

おねい婆さんは言つた。夕食の時、必ず二人の間に交される會話であつた。洪作はそれに対していつもいい加減な返事をした。行かないことを約束するわけには行かなかつたからである。上の家の附近が、洪作ら少年たちの遊び場の中心地で、一日に何度も水も飲みに行かなければならなかつたし、珍しいものでも作つていればそれも食べに行かねばならなかつた。

「上の家へ行くと、あんまりええことはないぞ。大五の餓鬼はほんとに小憎らしい。道で会っても知らん顔してけつかる。みつはみつで、前はほんに気前のええ子だったが、いまはみんなを見習うて、いつ会ってもふくれっ面をしよる。大方、大人たちが悪いことを吹き込んでるぞらよ」

おぬい婆さんの言うことは決っていた。洪作は三百六十五日、毎晩のように本家である上の家の悪口を耳にしなければならなかった。おぬい婆さんは本家の子供たちの悪口を言ったが、本当はその親である洪作の祖父父母たちをやっつけたくて堪らないらしかった。しかし、さすがに祖父父母の名は口に出さなかつた。そうしておぬい婆さんの心の内部は、子供の洪作にも手を取るようによく理解できた。

「上の家のおじいさんは嫌いだ」

時に洪作が祖父のことをこう言おうものなら、おぬい婆さんは眼を細めて、洪作の頭を撫でんばかりの恰好で膝をすり寄せて来た。

「洪ちゃんの本当のおじいさんだぞ。眼に余ることがあるうと、どんなことを言われようと、悪口を言うでないぞ。いいかい。上の家の衆は料簡は狭いがみんな根はいい人たちなんじゃ」

そんなことを言った。それは洪作に言うというより、自分自身に言うて聞かせる言葉を声に出して言うてに違ひなかつた。

洪作は嬉しそうなおぬい婆さんの顔を見たいため、時々本家の上の家の悪口を言った。悪口を言う気になれば、実際悪口になる材料は幾らでもあった。洪作は同じ年のみつと毎日のように一緒に遊んでいたが、上の家の祖父父母ははつきりと自分の孫より自分の娘の方を可愛がっていることを示したし、犬猿ただならぬおぬい婆さんに引き取られて一緒に住んでいるというだけで、洪作を自分たちの仇敵の片割れのように見る場合もあった。

また上の家には、洪作には曾祖母に当るおしな婆さんも住んでいたが、この曾祖母までが洪作をとかく色目で見がちであった。おしな婆

さんは祖父の養母に当り、家の者たちと血の繋りはなかったが、みなからは大切にされてきた。高齢のため居るか居ないか判らぬように奥の一室に閉じこもったままひっそりと生きていたが、いつかたまたま洪作と顔を合せた時、

「可哀そうに、ろくでもないもんの人質になって、この子はだんだん変な子になりよる」

と言ったことがあった。その時洪作は皺だらけの顔の中で口がもごもご動くのを見詰めていたが、やがて、

「おばあちゃん、いい年して死なんのか。いつ死ぬんだ？」

と言った。実際に洪作には、背を折れそうに曲げて、たるんだ皮膚に深い皺が刻まれている八十歳を越えた老婆が、いつまでも生きて口をきいているということが不思議に思われた。

おしな婆さんは洪作の言葉に呆れ果てたというように眼をしろくろさせて二の句が継げないという恰好だった。洪作は、おぬい婆さんを悪もんと言い、自分を変な子になったと言ったおしな婆さんに一矢報いてやり、一日中置物のように一箇所に坐ったまま動かないでいる老婆の許から離れた。

おぬい婆さんは曾祖父辰之助の妾であった。辰之助は地方では名医で通った医者で、第一回の三島の県立病院長をしたくらいだったから、まして彼が野心的な人間であつたら、晩年を郷里の伊豆などへ引つ返まなくしてすんだ筈であつた。それをどういうものか、一番働き盛りの四十代半ばに、すべての公職を棄てて伊豆の山奥へ引つ込んで、田舎医者として余生を送ったのである。辰之助は田舎で開業医として忙しく暮した。駕籠で、半島の基部の三島や、またその反対の半島の尖端部の下田まで、往診に出掛けるような繁昌ぶりを示した。

おぬい婆さんは、その辰之助が下田の花柳界から落籍して連れて来た女性で、それでなくてさえうるさい土地では、かなり色々取沙汰さ

れた人物であった。おぬい婆さんは辰之助が十五歳で他界するまで蔭になり日向になりして辰之助の面倒を見、その死後も村に居ついてしまった確り者だから、村人全部から白い眼で見られるだけのことはあったようである。

辰之助は中年以後、正妻のしなとはずっと別居していた。しなは沼津の山本という家老の娘で、嫁に来てから一度も台所に出たことがないといった女性であった。よく言えば世間知らずのおっとりした女であり、悪く言えば、何もできない女であった。婚礼の時朱塗の風呂桶と二本の薙刀を持って来て、そのことが長く村人の語り草となっていた。

辰之助は本妻のしなとの間にも、妾のぬいとの間にも子供がなかったので、自分の兄の子供である文太を養子として迎え、それまでの家、つまり上の家を文太に譲って、自分は近くに家を一軒構えて、そこで開業して妾のぬいと住んでいた。晩年辰之助は文太の長女を分家させ、医者を開業していた家を与えることにし、その養母としてぬいを分家の籍に入れた。辰之助は妾のぬいの晩年をそのようにして酬いてやったのであった。戸籍上祖父の妾を養母とするようになった文太の長女は、洪作の母、七重である。

洪作の父は軍医で、その頃母七重と共に任地の豊橋に住んでいた。どうして洪作が両親のもとを離れて曾祖父の妾ぬいの許に預けられるようになったか、当時の洪作には勿論理解の行かないことであつたが、それはおしな婆さんの「悪いもんの人質になつて」という言葉が、ある程度真相をうがった言い方であつた。おぬい婆さんは、洪作の家における自分の不安定極まる地位をもっと確りしたものにするため、洪作の両親から洪作を人質として取り上げるといった気持ちもないではなかつたに違ひなかつた。

最初、洪作の母が洪作の妹小夜子を妊がした時、人手が足りない理由でごく一時的に洪作はおぬい婆さんに預けられたのであつた。おぬい

婆さんは自分の懐ろに転がり込んだ願つてもない宝物を、一度手に入れた以上終生決して離すまいと決心したので違ひなかつた。おぬい婆さんがそうした考えのところへ、洪作自身が、おぬい婆さんのもとで五歳から六歳へかけての一年を過すうちに、両親よりおぬい婆さんの方になつてしまつて、家へ帰りがなくなつてしまつたことも大きな原因であつた。

こういうわけで、洪作は五歳からずっと郷里の伊豆半島の天城山麓の山村で、おぬい婆さんという全く血縁関係にはない女性と起居を共にすることになつたのであつた。従つて、おぬい婆さんと本家の上の家とは、全く仇敵の関係にあつた。曾祖母のおしな婆さんにしてみれば、おぬい婆さんは自分から夫を奪つた不倶戴天の仇敵であつたし、祖父母たちから言わせれば、曾祖父辰之助に取り入つてついに本家よりも大きい家屋敷を手に入れ、しかも自分たちの娘を養女としてその養母になりすまし、いまは孫の洪作まで人質に取り上げてしまつていゝ腹黒い女であつたのである。

上の家は人の出入りの多い家だつた。平生は洪作の祖父母のほか、洪作と同年のみつ、みつより三つ年長の大五、それに曾祖母のおしな婆さんの五人暮しであつたが、この他の人物が絶えず出入りした。それは東京の中学校へ行っている大三と沼津の女学校へ行っているさき子であつた。大三とさき子は休暇ごとに家に帰るのは勿論だが、それ以外でも日曜と休日が続いたりすると、必ず家へ帰つて来た。二人とも、洪作にとっては叔父と、叔母に当るわけであつたが、みつが大三のことは兄さん、さき子のことは姉ちゃんと呼んでいたの、洪作もまたそれに倣つて同じ呼び方をした。

だから、正月とか、春休みとか、夏休暇の時は、上の家は大人数だつた。食事の時などは子供の洪作の眼にもひどく賑かに見えた。朝から晩まで奥の一間に閉じこもっているおしな婆さんも、食事の時だけ

は鉢を二つに折って、畳を管^{くだ}めるようにして食卓のある居間へ出て来たので、八畳の部屋はいっぱいになった。曾祖母おしな、祖父、祖母、大三、さき子、大五、みつと家族^{かぞ}だけでも七人、それに大抵使用人が一人か二人いた。

祖父文太と祖母たねは子沢山で、この他にまだ四人の子供を持っていた。長女は洪作の母である七重であり、その下がアメリカへ渡っている大^{だい}一、満州へ行っている大^{だい}二、それから同じ半島の西海岸の大きい農家松村家へ嫁いでいるすず江である。しかし、洪作は大^{だい}一にも、大^{だい}二にも、またすず江にも会ったことがなかった。ただ名前だけは、何れもみつの呼び方に倣^{なま}って、大^{だい}一兄さん、大^{だい}二兄さん、すず江姉さんと呼んでいたが、どのような風貌^{ふうぼう}を持っている人物かは全く知らなかった。

祖母のたねが、時々、洪作がみつと同じような呼び方をするのを聞き咎^{とが}め、

「坊は、大^{だい}一叔父さん、大^{だい}二叔父さん、すず江叔母さんと呼ばんといかん。兄さんや姉さんじゃない。叔父さんと叔母さんじゃ」

と訂正した。しかし、洪作はそれに応じなかった。もしそうするなら、大三兄さんも大三叔父さんでなければならなかったし、さき子姉ちゃんもさき子叔母ちゃんと呼ばなければならなかった。そんなことは考えてみただけでおかしくて口から出せないことだった。さき子姉ちゃんを叔母ちゃんなんて言えるかと洪作は思った。

しかし、洪作はある時ふといたずら心から、さき子を叔母ちゃんと呼んでみたことがあった。さき子がどんな返事をするか興味があった。

「さき子おばちゃん」

洪作が呼びかけると、さき子は当時女学生の間で流行していた三つ編みの長いお下げ髪を、肩から前へ垂らしていたが、その髪の束をばんとしるへ投^なげて、

「おばちゃんなんて言っちゃいけない。そんなことを言ったらきかないから」

と言った。

「だって、おばちゃんじゃないか」

「おばちゃんでも、おばちゃんなんて、二度と呼ばないでちょうだい」さき子は怖い顔をして洪作を睨^{にら}んだ。洪作がさき子を叔母ちゃんと呼ぶことに抵抗があるように、さき子もさき子で、自分がおばちゃんと呼ばれることを嫌った。洪作は大^{だい}五のことは「五ちゃん」と呼び、みつのことは「みつちゃん」と呼んだり、仲違^{なご}いしている時は「みつ」と呼び棄^すてにしたりした。

おぬい婆さんは上の家の子供たちのことは、面と対^{たい}った時は別だが、蔭^{かげ}ではほとんど呼び棄^すてにした。呼び棄^すてにするばかりでなく、大抵悪意のある形容詞をつけた。「ぐずのおみつ」、「あくたれの太^お五^ご」[#]困りものさき子[#]、ろくでなしの大^{だい}三^{さん}”といった具合である。形容詞をつけないで名前だけを呼ぶというようなことはほとんどなかった。ただ一人例外として、おぬい婆さんは、生れるとすぐ死んだ四男だけは褒^ほめた。

「あの赤ん坊は利発そうなええ顔をしておった。あれが育^そったら、上の家ももう少しましになつたらうが、世の中はうまく行かんもんじゃ」そんな憎まれ口をきいた。

洪作にとって、おぬい婆さんと二人だけの土蔵の中の生活は結構楽しかった。何一つこれといった不満はなかった。上の家へ行くこと、賑か^{にぎ}かで面白^{おもしろ}いではあったが、そのことが特別に羨^{うらや}しくも思われなかった。洪作の土蔵の中の生活は、判^はで押^おしたように毎日決^きりきつたことの繰返^{くりか}えしであった。朝眼^{あそめ}が覚^さめると、洪作は必ず、それが朝の挨拶^{あいさつ}でもあるように、床^{とこ}の中で、

「おばあちゃん」

と、おぬい婆さんと呼んだ。おぬい婆さんは耳が遠いことになって

いたが、不思議にこの「おばあちゃん」と呼ぶ洪作の声だけは、階下にも、また土蔵の外で炊事をしている時でも、耳さとく聞き分けられた。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

洪作が二声三声呼んでいるうちに、必ず、

「どっこいしょ、どっこいしょ」

と、階段を上って来るおぬい婆さんのかげ声が聞えて来て、それが終わったと思うと、階段を上りきったところでおぬい婆さんが背を伸ばす姿が見えた。おぬい婆さんはそこで一息入れてから、

「あいよ、あいよ」

とたて続けに返事をして、戸棚をあけ、そこに用意してある紙にひねった駄菓子を持って洪作の枕許へやって来た。

「はい、おめざ」

おぬい婆さんは紙包みを洪作の手に握らせたり、蒲団の中に突っ込んだりして、

「ごはんできるまでまだ間があるから寝とれや」

と言って、また階段を降りて行った。早く起きよとも、起きて顔を洗えとも言わなかった。ひねり紙の中味は大抵黒砂糖の飴玉だった。

洪作はその黒玉を二つか三つしゃぶり終えるまで床の中にはいつていた。

こうした朝のおめざは、上の家では非難されていた。祖母のたねはよく、

「顔も洗わんで黒玉なんぞしゃぶって、いまに歯がぼろぼろになる」

と、洪作に言った。そのことを洪作がおぬい婆さんに告げると、

「ぼろぼろになるような歯は坊は持っとらん。おみつとは違うわい。そう言っておやり」

と息まいて言った。兎も角、毎朝のように、洪作は寢床の中で黒玉をしゃぶった。時には、それが大きい水晶玉一個の時もあった。水晶

玉は白砂糖の飴玉で、微かにハッカの味がした。それ以外では豆板とか、ねじまきとかいった駄菓子が時たま当った。

おめざを食べ終ると、洪作はまた、

「おばあちゃん、おばあちゃん」

とおぬい婆さん呼び、

「起きていい？」

と訊く。

「さあ、起きな。あつあつの味噌汁ができてる」

おぬい婆さんは言いながら、洪作に着物を着せ、つけ紐をきゅうとしごくようにして、それを前で結んだ。着物を着せて貰いながら、洪作はいつも鉄格子の小さい窓から戸外を見た。窓のすぐ向うにざくろの木があつて、ざくろの葉が窓いっぱいにかぶさっているの、その葉越しに、戸外の風景を眺めることになる。風景といつても、ざくろの葉の間から見えているのは田圃であつた。夏は青い稲田が、冬は冬枯れた黒っぽい稲の切株の置かれてある田圃が見えた。向いの家で作っている田圃の一枚が、丁度土蔵の窓の高さにあつた。洪作の家の敷地と小川で境し、その向うの田圃になっている地盤は一メートルほど高くなつていた。

しかし、田圃の一枚が見えるのは立っている時で、もしこの窓へ身を寄せて、そこから戸外を覗くと、次第に傾斜している何枚かの田圃と、陥没した地盤を置いてその向うにある隣り部落の一部が見えた。

丘が見え、農家が見え、森が見え、白い街道が見え、そしてずっと遠くに玩具のような形の小さい富士が見えた。

洪作は着物を着ると階下へ降りて行って、家の敷地の端を流れている小川の一部の、板を敷いて流し場になっているところで顔を洗つた。小川の向うは一メートルほどの高さの土堤になっていて、その土堤の上には土蔵の二階から見える田圃が括っているわけである。洪作は手で水を掬い、口に含んで二三回ぶくぶくをすると、あとは同じよ

うに手で水を掬っては顔を撫でる。顔を洗うのには何程の時間もかからないが、冬期には土堤の草の一本一本に氷柱がぶら下るので、それを手でむしり取ったり、地面へぶつけたりすることで結構時間を費す。それで、おぬい婆さんが迎いに来るまで洪作はこの洗い場からなかなか離れられなかった。

食事は二階の階段を上りきったところの、南の窓の傍で食べる。この窓も北の窓と同様に鉄柵がはめられてあった。朝食の献立は、毎朝決っていて、それが変わるようなことはめったになかった。変わるものと言えば、味噌汁のみと漬物の種が季節によって大根になり、茄子になり、瓜になるだけの話だった。味噌汁と漬物の他に、生妻とらっきょうと金山寺味噌が常に食卓の上にあった。こうした献立は朝ばかりでなく、昼食にも夕食にも共通していた。おぬい婆さんは食事の手をかけることが嫌いであるし、その上魚肉も牛肉も好まないの、朝食と、昼食や夕食の違いは、菜っぱの煮つけが加えられてあるかどうかということぐらいのものであった。

「さあ、坊、熱い味噌汁をごはんにかけるかい」
とか、

「金山寺のお茶漬するかい」

とか、おぬい婆さんは食事ごとに、洪作に御飯に汁類をかけることを勧めた。おぬい婆さんは自分が齒が悪くて、三度三度そうして食べていたので、いつかそれを幼い洪作にも押しつけていた。

朝食を食べていると、近所の幸夫や亀雄や芳衛などの、洪作を学校へ誘う声が聞えて来る。

「洪ちゃ、学校へ行こう。洪ちゃ、学校へ行こう」

そう言って、何人かの子供たちが声を揃えて土蔵の前で呼ぶが、それは、コウチャ、ガッコエウと聞える。登校の誘いであるが、学校の始まるまでには、いつでもたっぶり一時間はあった。時には一時間半近くもあることもある。学校までは走れば五分もかからなかった。

それでも友達の声が聞えると、洪作は教科書と弁当を大急ぎで風呂敷に包み、それを持って大周章にてあわてて、階段を駆け降りる。

「坊や、坊や」

そのあとから決って、おぬい婆さんは紙かハンケチを持って追いかけて来る。紙やハンケチなどは、部落の他の子供たちには無縁のものであった。洪作もまた、そんな物を持って行っても使うことはなかった。しかし、おぬい婆さんは大切なものでも忘れたように追いかけて来る。おぬい婆さんはうちの坊は他の部落の餓鬼共とは違っているのだという信念を持っており、違っていることの一つの証拠として、洪作に紙やハンケチを持たせねばならないのであった。

子供たちは次々に部落の家を廻り、学校へ通っている仲間を誘い出すと、御料局の横手とか、洪作の家の傍の田圃のいなむらの傍だとかに集って、登校するまでの時間をたっぶりと遊んだ。子供たちの屯ろするところは時々変った。誰が命令して変らせるわけでもなかったが、自然に集る場所が変った。そしてそこへ集り出すと、二カ月でも三カ月でも同じ場所ばかりに集った。男は男、女は女で別々の場所に屯ろした。

子供たちがその集合場所でやる遊びも、一つのことをやり出すと長い期間そればかりやった。そしてそれにすっかり倦きてしまうまでそれをやり、倦き倦きしてしまうと、新しい遊びが彼等の心を捉えた。そしてその新しい遊びが、またある期間子供たちの間に流行し、よく倦きもしないでやると思われるほど、子供たちはそればかりやった。斯くして子供たちはメンコに熱を上げたり、鳥のわなに夢中になったり、角力の番付を毎日のように作ったりした。

そしていい加減遊び疲れた頃、よくしたもので誰かが学校へ行くことを思い出し、みんなひと固まりになって、学校へ移動して行った。その頃になると、学校の正門を指して、半里も、一里も離れた部落の子供たちが、それぞれやっはりひと固りになって新道や旧道に姿を

見せる。

子供たちは集団集団でお互いに敵意のようなものを持っていた。みんな怖い顔をして、他部落の者たちをねめ廻しながら学校へと急ぐ。決して口はきかない。口をきかないどころか、時には何の理由もなしに相手に石をぶついたりする。そしてこの敵意は学校の門をはいって、部落単位の集合が解かれるまで続く。

小さい校舎は八つの教室を持っていた。一年から六年まで、各学年がそれぞれ一つの教室を持ち、その他に高等科の教室が一つと裁縫室が一つあった。一学年は大体三十人ぐらいである。みんな同じような棒織の着物を着、藁草履を履き、たくあんのはいった弁当箱か、梅干のはいったむすびを持ち、同じように汚い顔とでこぼこの頭を持っていた。

教師は教室の数と同じく八人いる。一人ずつ一つの教室を受け持っている。先生たちは大抵すぐ生徒の頭をなぐったり、小突いたりするので、生徒たちは教室へはいると、刑務所へでもはいったようにしんとした。いつも一年を受け持つ先生が一番きびしかったので、一年坊主は大抵殴られまいと緊張して顔を蒼くしていた。

一日の授業が終ると、子供たちは家へ荷物を投げ込んで来て、集合場所へ集る。上級生と下級生とで授業の時間が違うので、遊び場所には初め下級生の顔ばかりが見えるが、次第にそれに上級生が加わってふくれ上って行く。そして夕刻^{*}、しるばんばが舞う時刻まで遊び続けるわけであった。

二一章

洪作が二年になった春、上の家ではさき子が沼津の女学校を卒業して、家へ帰って来た。洪作はさき子がもう沼津の学校へは行かないで、ずっと村に居るようになることを知って、何とも言えず明るい楽

しい気持がした。洪作は上の家へ行くのが楽しくなった。今までも冬休みや夏休みにはさき子は必ず帰省していたが、さき子が居ると居ないのとは、上の家は全くそこにてこめている空気が違っていた。さき子一人が居ることに依って、善微の大輪でも活かっているように、上の家は陽の当たらない奥の部屋までが明るく華やかなものに感じられた。

さき子は他の村の娘とは違って、沼津の女学校に行っていただけあって、身に着けている雰囲気は都会的であった。三つ編みにしている髪形にしる、着ている着物にしる、口のきき方にしる、そしてその歩き方までが当時の言葉で言えば垢ぬけてハイカラであった。

洪作はさき子が居るようになると、上の家へ日に何回も行った。何となくさき子の傍へまといついていたい気持があった。しかし、おぬい婆さんはさき子が嫌いであった。

「いやにしゃなしゃなした娘だ。いまにろくでもないことを仕出かすぞら」

さき子の話が出ると、口癖のようにおぬい婆さんは言った。おぬい婆さんはさき子を眼の仇にしたが、よくしたものでさき子の方でもまたおぬい婆さんを嫌っていた。さき子は道などでおぬい婆さんと顔を合せても、子供の洪作にも感じられる程みごとにおぬい婆さんを無視し、いささかも意に介さない態度を取った。おぬい婆さんの方は、はっきりと敵意を露わにして、極端な仕種で顔を横にそむけたが、さき子の方は、顔などそむけないで、全く普通な態度を取りながら、声もかけなければ挨拶もしなかった。全くそこにおぬい婆さんが居ることなど気が付かないかのように振舞った。

そんなおぬい婆さんとさき子の関係だったので、洪作は子供ながら、その間に挟まって気を揉むことが多かった。さき子にはおぬい婆さんを、おぬい婆さんにはさき子を何かと取り做すようにした。しかし、洪作のそうした気遣いは全く無駄だった。